

モデルコース①～④【資源解説】

- ①棒道の石仏探訪
- ②湧水をたどる
- ③信玄棒道
- ④信玄伝説の地

棒道の石仏

江戸時代末期に、棒道を行く旅人や商人の道標として安置された石仏群。西国三十三所・坂東三十三所にぞらえた観音像であり、現在も39体残されています。江戸時代に全国で流行した、観音霊場を模したもの(写し霊場)で、巡拝すると札所巡りと同等の功德が積めると考えられています。石仏には札所の番号、一部には御詠歌(札所の参拝時に詠うと功德が高まる和歌)や施主、造立年などが刻まれています。当初は秩父三十四箇所と合わせて百体造る予定でしたが、旧小淵沢村と旧小荒間村の村境付近にある坂東十六番で途絶えたようです。聖観音、千手観音、如意輪観音、馬頭観音、空不羅索観音の六種があり、西国・坂東の札所の本尊の種類とほぼ一致しています。顔の表現に力を入れるためか、頭が大きめであることや、衣の裾を跳ね上げるようなデザインが多いことが特徴。また、細かい加工がしやすく黒っぽい石である安山岩や玄武岩といった、ハケ岳の火成岩を用いて作られています。一部は岩石中の銅成分が染み出して緑青が付くことにより表面が緑色に変色したり、地衣類(藻類の一種)がついて白くなったりと、石材の状態にも個性があります。光背(仏像の後ろに付ける、仏身から放たれる光を象った装飾)の形も、自然な石の形をそのまま立てたもの、石に彫り込んだものなど様々です。一つ一つの表情、造形、石材の様子、ノミ跡といった細部を見比べながら歩くことにより楽しめます。石仏には花や食物が供えられていることもあります。地域で大切にされているからこそ、江戸時代末期から現在に至るまで、39体もの石仏が残されているのです。



坂東十一番(聖観音立像)



坂東十番(千手観音坐像)



西国二十九番(馬頭観音坐像)



西国三十番(千手観音立像)



送り犬の伝説

昔、棒道は中馬遣い(馬を使った荷運びをする職業)がよく利用していました。夜に棒道を歩くと山犬がついてきて、人が転ぶと噛み付くのですが、「一休みですよ」と声をかけると噛みつかれず、火を見せると逃げる。村の近くまで来たら、「ご苦労様でした」と声をかけると、いつとなく離れていく、といわれています。また、ある人が送り犬の口に刺さった骨を抜いてやると、オオカミの大群に遭わないよう袂の端を引いてくれたといえます。かつて棒道を歩いた人々の様子が分かる伝承です。

富蔵山公園

牛馬の神である富蔵山(長野県)信仰が伝わる地で、大小様々な馬頭観音が数多く安置されています。馬を取引する馬喰、馬の医者である伯樂が多かった北杜市で、馬頭観音はよく信仰されました。武田信玄が小荒間で合戦した際に戦死した馬を祀ったという伝説もありますが、この合戦は実際にはなかったようです。入口には怒りの表情を浮かべた馬頭観音があります。優しい顔をしている棒道の馬頭観音と対照的な、典型的な馬頭観音です。正面の蠶玉太神の碑は蚕の神を祀ったものです。養蚕の始まりに馬が関係することから、馬頭観音と蠶玉太神を関係させて祀る例はありますが、北杜市は県内でも養蚕に取り掛かるのが遅れたためか、両者を結びつけて祀る例はあまり見られません。例えば横手駒ヶ岳(白州町)の辺りでは、馬頭観音は養蚕を守護するものと考えられています。入口の階段には細い線が入っていますが、これは手彫りによるノミ切りという仕上げに特有のもので、見た目を美しく仕上げるだけでなく、滑り止め効果もあります。様々な石造物を観察できる公園です。



小荒間番所跡

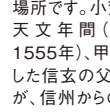


村人が馬で荷運びをし、ここを通過して諏訪との交易を行っていました。番所の建物は現存しておらず、跡地には石祠、道祖神、道標が置かれています。三分一湧水館では江戸時代の番所の復元模型を見ることができます。

番所とは、国境で旅人や物資の移動を監視する場所です。小荒間番所は天文年間(1532～1555年)、甲斐国を統一した信玄の父・武田信虎が、信州からの防衛のために設けたとされます。番所は江戸時代になると口留番所と呼ばれ、甲斐国には25カ所の口留番所が置かれていました。近隣3村の農民が村役で警備を担当し、江戸末期には

六所神社

源清光の孫・逸見基義が「六所大明神」として建立しました。武田信玄がご神体を奉納したという伝説があります。祭神は伊弉諾命(イザナギノミコト)をはじめ、日本国土の創生と人類の発生に関わる重要な神々で、六所神社だけで六カ所の神社にお参りしたのと同じくらいの功德があるといえます。六所明神がゴマの茎で目をつぶしたという言い伝えがあり、近辺ではゴマの栽培が避けられてきました。ハケ岳山麓の高冷地はゴマの栽培に適さないため、単一栽培を避けて他の作物と混ぜるように教える俗信だと考えられています。



棒道周辺の石祠



がほとんどされた石祠は峡北地方特有です。柱は凍害(石中の水分の凍結、膨張による害)により破損、紛失していることも多いようです。こうした石祠は市内に無数に見られます。

三分一湧水

ハケ岳山麓にある岩盤の割れ目からは、峰々に降り積もった雪・雨水が清らかな水として湧き出ており、ハケ岳山麓高原湧水群と称されています。三分一湧水はその一つです。湧水は、ハケ岳山麓の人々にとって貴重な水源です。ハケ岳山麓は大きな河川がなく、湧水以外の水利が乏しかったため、農業用水は湧水に頼らざるを得ず、水を巡った争いが絶えませんでした。三分一湧水には、分水地が設けられ、水を三方向に平等に分配する工夫がされています。江戸時代の「おんだし」(山津波、土石流)で湧水口が坂本家という有力者の領地内に移動して以来、江戸時代から近年に至るまで、坂本家が三分一湧水の管理を取り仕切ってきました。三方向に分けられた水は、主に灌漑用水として利用されています。

女取湧水

ハケ岳山麓高原湧水群の一つ。古くから灌漑用水として利用され、現在も長坂町の水道水の相当部分を賅っている重要な水源です。「女取」という名称の由来として、女性と蛇にまつわる伝承が残っています。一説には、青年・八造が、誠実の証として身分違いの恋人に巾着を渡そうとしたところ、道中で溺死。それを知った青年の母・おかよは、息子の恋人を恨み、息子が死んだ川に身を投げ、若い娘を取り殺す蛇となった。また一説には、幼い少女・小夜が水に落ちた巾着を拾おうとして、ところ、竜神によって水の中へ引き込まれた。いずれも、「女を取る川」であることから、女取と名付けられたということです。



八右衛門出口湧水

大木の根本から湧き出る清水。古くから灌漑用水として用いられてきました。この名前の由来には言い伝えがあります。ある日、山に出かけた八右衛門は1匹の蛇を山火事から助け、お礼に1本の楊枝をもらいました。その楊枝を裏山に突き刺してみたと、きれいな水が湧き出てきたといわれています。



道祖神

小荒間集落のはずれにあったこの場所には、二人の神を祀る道祖神(双体道祖神)が、北杜市には珍しい木祠に祀られています。こうした道祖神は、ムラの入り口で病気などの災いからムラを守る神であり、旅人の安全を見守る神でもありました。



湧水と堰

農業用水路のことを指します。湧水から伸びる堰は、棒道沿いでも見られます。坂東2番の石仏付近は、棒道沿いに女取湧水からの堰が流れています。三分一湧水付近から西国19番の石仏付近の堰には、ところどころに下り口が設けられており、野菜などを洗えます。湧水が生活に密着している様子が見て取れます。



長坂三ヶ区の札番・水番制度(山梨県指定無形文化財)

水争いを解決するための工夫として、三分一・八右衛門出口・女取湧水の下流にある長坂上条、長坂下条、渋沢の旧長坂町の3集落(三ヶ区)では、三つの湧水と堰の点検・清掃を地域の当番制で行う仕組みが、江戸時代から現在まで続けられています。点検時に当番が札を入れかえ、点検済みであることを示す「札所」は、各湧水の近くで見ることができます。

三分一湧水館

湧水の仕組みや水争いの歴史、棒道の解説など、地域の歴史民俗について展示されています。地元産品がならぶ直売所、ハケ岳の蕎麦粉と名水で打ったそばが楽しめるそば処が併設。



八達衛神の碑

棒道沿いにある道祖神で、棒道の石仏とほぼ同時期に造立されました。正面には「天(異体字)八達衛神」、側面には「此棒道たるや 甲信の往来として 武田家戦場の昔し国中に命して 悉路次を造らしめしか 其後更ふり靡せり依之口方の扶助を得再補里して 人馬の一助となすもの也」と刻まれ、当地の人々が棒道を「武田家が軍用道として作らせたもの」と考えていたことが読み取れます。



逸見神社

創立年代は不詳ですが、逸見清光によって建立され、逸見氏代々崇敬の社であったことから逸見神社と称したとされています。その後、武田氏、徳川氏からも寄進を受け祈禱するなど厚い崇敬を受けていました。谷戸城を国指定史跡として整備するに当たり、城内に祀られていた八幡神社が合祀され移設されました。そのため鳥居が2つあり、また本殿の裏手に回ると、八幡神と諏訪明神の社が立ち並んでいるのを見ることができます。1574(天正2)年のハケ岳崩壊が引き起こした洪水で、逸見氏、武田氏による寄進物はすべて流出したとされ、今も境内に散在する巨石が水害の凄まじさを伝えています。

